新島襄の孤独と同志社

講演	中村　信博〔なかむら・のぶひろ〕
講師紹介	同志社女子大学学芸学部特任教授

はじめに

同志社女子大学の中村信博です。２０２１年度秋学期のDoshisha Spirit Weekにお招きをいただき、しばらく同志社という私たちの学校が大切にしてきた歴史と精神について、ご一緒に考えることができますことを嬉しく思います。

早速ですが、きょうはみなさんと「新島襄の孤独と同志社」という主題で考えてみたいと思います。

しかし、このテーマ、どことなくしっくりしません。まず、「新島襄の孤独」と「同志社」なのか、それとも「新島襄」の「孤独と同志社」なのか、あるいはまた「新島襄の孤独」と「（新島襄）の同志社」なのかが明瞭ではありません。「の」や「と」といった格助詞の使い方が曖昧で、テーマを予告した本人が申しあげるのも無責任ですが、全体がぐらぐらとしている感じが否めません。

もちろん、言い換えてみることで、もう少しわかりやすくすることもできます。たとえば、「同志社と新島襄の孤独」とすれば、同志社という学校と対比するように新島の孤独について考えようとする意図が表れて来るかもしれません。ですが、「孤独」と「同志社」はかならずしも併行的な概念ではありませんから、ふたつをどのような意味で並べようとしているのか、やはり釈然としません。そして、創立者の名前が彼によって創立された学校の名前よりもあとに来ることも時間の流れに逆行するようで、これもまたすっきりしないのです。さらに、「新島襄にとっての孤独」と「新島襄にとっての同志社」とすることも可能ですが、そうすると、今度は「孤独」と「同志社」とは別のものになってしまいます。

同志社という学校

なんだか苦しい言い訳から始めることになってしまいました。ですが、この曖昧な「新島襄の孤独と同志社」には少しばかり理由があります。

それは、今回、Doshisha Spirit Weekという特別な一週間の枠組みのなかでお話させていただくからです。私はこれまでに何度かこのDoshisha Spirit Weekでお話をさせていただいてきました。ですが、改めて考えてみますと、ここで使われているSpiritという英語がどのような意味で共有されているのかよくわかってはいなかった気がいたします。これまで、この特別なときにお招きをいただく度に、さきほども「同志社という私たちの学校が大切にしてきた歴史と精神についてお話をしてきました」と申しましたように、さほど意識もせずに同志社の歴史と精神について、私自身の体験も織り交ぜながらお話をしてまいりました。

「同志社大学」ではなく、「同志社という学校」という言い方をいたしましたのにはふたつの理由があります。ひとつは、同志社は１８７５年11月29日に、同志社大学ではなく「官許同志社英学校」として設立されたことにあります。もちろん、そのころの日本には私立の大学を設置するための法律すらありませんでしたから、私たちは、当時の日本社会の教育事情を思い起こすためにも、この大学の歴史が英学校という名前によってスタートしたことを忘れないでおきたいと思います。

そして、ふたつめには私自身が同志社大学ではなく、お隣の同志社女子大学に所属していることもその理由です。同志社の長い歴史を振り返りますと、創立以来、同志社の名前を冠したいくつもの学校がつくられ、ときには廃止され、学制の改変や法律の変更などとも関係しながら、１５０年に近い長い時間をかけて、ようやく現在のようにふたつの大学、４つの中高、小学校、幼稚園、また国際学院初等部、国際部を擁した屈指の教育、研究機関、学校法人として発展してきたのです。

「同志社という学校」という言葉には、同志社大学、あるいは同志社女子大学だけではなく、新島襄という同じ創立者の祈りと精神を共有しながら歴史を歩んできた同志社のすべての学校はバラバラにではなく、大きなひとつのまとまり、ひとつの学校であるという思いをこめて表現したつもりでした。

Spiritについて

さて、ではこの私たちの学校、同志社のSpiritとはいったい何でしょうか。

辞書によれば、Spiritには多くの意味を確認することができます。主なものをあげれば、「生命の原動力、生命の息吹、（物質に対して）精神、心、魂、霊魂、感情や気分、活力など」ということになります。あるいは、とくにキリスト教に関連して「息、人を鼓舞し、生き生きさせる霊力、神の霊、人間の心に働きかける神、聖霊」などとする使われ方もあります。ちょっと面白い用例としては、しばしばspiritsを単数扱いにしてウイスキーやブランデー、ジン、ラムなど少し強めのアルコール飲料を指すこともあります。おそらく、強いアルコールは気分を高揚させ、精神的機能を活性化させる効果をもつことからの連想だと思います（以上、Spiritについては、小学館『ランダムハウス英和大辞典』第２版、１９９４年、ジャパンナレッジ版を参照）。

このようにSpiritはキリスト教にとっては非常に大切な概念です。キリスト教神学の世界では、教義学、組織神学と呼ばれる学問分野のなかに「聖霊論」と呼ばれる専門分野があることからもご想像いただけるかと思います。「聖霊論」は英語ではしばしば、新約聖書が書かれたギリシア語のプネウマという言葉に由来するPneumatologyという言葉が使われています。ギリシア語のプネウマには風、息（呼吸）、魂などの意味があります。よく知られているのは、イエスの母マリアは聖霊によって懐妊した（ルカによる福音書１章35節）とされていますから、この場合の聖霊は、考えられないことを可能にする目に見ることのできない働きと考えられていたことがわかります。あるいは、同じ新約聖書には「あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです」（コリントの信徒への手紙一６章19節・『新共同訳　聖書』、日本聖書協会、１９８７年、以下聖書の引用は『新共同訳　聖書』）とも書かれています。ここからは私たちの肉体が、たんに自分自身のものであることを越えて、私たち以外に神とつながる神聖な場所でもあるとする身体観を読み取ることができます。

旧約（ヘブライ語）聖書ではルーアハというヘブライ語がギリシア語のプネウマに相当しますが、その意味もギリシア語のプネウマによく似ていて、風や息（呼吸）、そして超越的な神の働きなどを指します。ここでもよく知られた使用例をひとつあげてみましょう。

> 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。
>
> （創世記２章７節）

神によって土の塵からつくられた人間が生きるようになったのは、その鼻に命の息が吹き込まれたからだ、というのです。ここで人間の鼻に吹き込まれた息がルーアハ、ギリシア語訳ではプネウマということになります。神の息が鼻に吹き込まれて生きるようになったとする人間観、みなさんはどのように感じられるでしょうか。

つながりの息吹

そもそも、土の塵から人間がつくられると聞いて、すぐに納得される方はいらっしゃらないかもしれません。ただ、ここで原語のヘブライ語では土はアダマ、そして人はアダムという言葉が使われています。引用いたしました『新共同訳　聖書』では、ヘブライ語は括弧のなかにカタカナで表記されていますから、わかりやすいかもしれません。アダマからアダムがつくられたというのは、ダジャレと言いますか、語呂合わせになっているのです。なんだか楽しい話ですが、一方で、なぜ土からつくられたのかを考えれば、人間が土に還る存在であることが暗示されていることがわかります。土に還る存在であるから、土からつくられているのです。楽しい語呂合わせが一気に哲学的な言説に見えてきます。日本語でも土に還ると言えば、「死」を意味します。

人間はいわば例外なしにこの死と向き合わなければならないのです。実存主義哲学の立場から、この世界の内（In der Welt）に存在する人間の問題を探求しつづけた20世紀ドイツを代表する哲学者M・ハイデガーは、この人間（Dasein）とはSein zum Tode（死に至る存在）であると定義しました。創世記は、まさにこの人間の本質を洞察しているのです。死から逃れることのできない人間が生きるために、この土の塊には神によって命の息が吹き込まれているというのです。命の息は、人間が生きるために欠かすことのできないものでした。

最近、宗教、文学、思想など幅広い分野で活発な研究、著作活動をつづけておられる東京工業大学教授の若松英輔さんが、ある座談会のなかでこんな発言をしておられました。少し長くなりますが、引用します。

> もう一つ考えたのは、感染の問題で飛沫とかエアロゾルとか、僕たちは呼吸を通じて交流していたということです。そのことに気づかされた。僕たちはこんなにも空気、呼吸というものによって世界と交わっていたことを、改めて自覚しました。
>
> まさに「プネウマ（pneuma）」という問題ですよね。「プネウマ」は、精霊であると同時に、息吹きそのものであるわけです。そういうものの交換を、たんに人間同士だけではなくて、非常に大きなコスモロジーからすると、植物との間においてもやりとりをしている。つまり光合成と呼吸という関係ですね。そういうところから考え直したいと思い、これまであまり手に取らなかった植物の本などを読み始めたのが、コロナ禍のなかでやってきたことでした。
>
> （末木文美士編『死者と霊性―近代を問い直す』岩波新書、２０２１年33ページ）

若松さんは、このコロナ禍の時代にプネウマこそ、意識しなければとおっしゃるのです。私たちは息をし、呼吸をすることで生きているからです。プネウマはいわば生命の根源であるのかもしれません。

荒唐無稽（こうとうむけい）にも思える土の塊に命の息が吹き込まれた話が、コロナ禍に苦しむ現代の問題に通じています。私は、もう長くこの命の息（創世記２章７節）を「つながりの息吹」と置き換えながら聖書を読んできました。そして、このように考えてみますと、私たちの身体が、私たちが所有して勝手に使用できる以上のもの、それは「神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿」（コリントの信徒への手紙一６章19節）であることにも、なるほどと思えるような気がしてまいります。

視野の限界

きょうのお話がDoshisha Spirit Weekのものであることを自覚しておこうと思いましてお話を始めたのですが、随分と長くなってしまいました。私はさきほど「新島襄の孤独と同志社」をあえて曖昧なテーマのまま設定しましたと言い訳を申しました。ですが、聖書やキリスト教の立場からSpiritを意識してみますと、新島襄と孤独と同志社という三つの要素がどのような関係のなかで、絡み合い、緊張し、相互に影響し合いながら、時間をかけて今日私たちが理解可能な同志社のSpiritにと導かれていったのか、その過程も含めて考えてみなければと思うのです。

新島はどのようにして、「つながりの息吹」を知り、「つながりの息吹」を自覚し、人びと、とりわけて同志社との「つながりの息吹」そのものになっていったのでしょうか。

私が同志社女子大学でしばらく担当をつづけてきた授業のなかに「近代日本と同志社」という科目があります。以前に、この授業で、函館から上海、香港、ベトナムやフィリピンを経由して、ほぼ一年の時間をかけてアメリカのボストンに到着した新島は、アジアの人びとのことをどのように理解し、どのように受けとめていたのでしょうか、という質問をいただいたことがありました。とても重要な視点です。ただこの質問をめぐっては、私自身がとても考えさせられたものですから、以前にDoshisha Spirit Weekに伺いましたときにも一度お話をさせていただいたことがあります（２０１７年５月30日「輪郭打破　―あなたはどこにいるのか―」京田辺校地）。重複いたしますが、おゆるしください。

新島は、函館から密出国をしたときにはセイボリー船長のベルリン号に匿（かくま）われて、まずは上海に向かいました。ところが、ベルリン号はそこから長崎に戻ることになっていたために、船長は新島の身を案じて、ワイルド・ローバー号という船のテイラー船長に新島を託しました。新島がボストンに入港したのはちょうど一年後のことでした。一年も要したのは、この船が貨物船であったからです。アジア各地の往来を繰り返し、貨物の積み卸しを繰り返してインド洋、そして南アフリカの喜望峰を経由してようやくアメリカ東海岸に到達したのです。

船上で過ごした一年間、新島が海外の諸事情をどのように見聞し、どのような感想をもったのかについては、このときのいわゆる『航海日誌』に書き残しています。現在、岩波文庫版の『新島襄自伝』（同志社編、岩波書店　２０１３年、以下『自伝』）に「一八六四―六五年　函館から上海、ボストンへ―航海日記」として収録されていますから、ぜひ読んでみていただきたいと思います。ちょうどみなさんと同じ年頃の青年の１５０年以上も昔の異文化理解はどのようなものであったのかがわかります。一部を引用してみます。１８６５年４月25日にジャワ島付近に近づいたときのことです。新島は

> この地の人物、色赤黒にして、柴棍（サイゴン・現ホーチミン）、マニラ等の同種なり。且つ歯を黒く染め、頭に色布を巻き纏い、見苦しき風俗なり。
>
> （『自伝』、１２３ページ、（　）は筆者注）

と書いています。今日の私たちの感覚からしますと、どう弁解しても差別的な印象が残ります。

この点について、高名な哲学者で以前に同志社大学で教鞭を執られた鶴見俊輔さんは、興味深い指摘をしておられます。鶴見さんは、同じころ、１８６０年に幕府使節の一員としてアメリカに渡った仙台藩士玉虫左太夫というひとが、復路、アジアを経由したときに書き残した日記を参照し、新島との決定的な違いを指摘されました。

玉虫はアヘン戦争以降、英国の蹂躙（じゅうりん）や支配によって疲弊する中国の人びとを見て、「傍観切歯にたえず」と書いています。つまり、日本人として傍観して歯ぎしりをするだけでいいのだろうか、というのです。鶴見さんは、玉虫のこの共感的な気持ちに注目しておられるのです。いっぽう新島はといいますと、鶴見さんの言葉を引用しますと、

> 新島には、植民地とされたアジア諸民族の苦しみを自分のものとして感じることが、できない。それは、新島が、日本の国家の利益にだけ心をしばられていたことから、来ているのだろう。日本国家の利益を中心にして考える時、新島にとって、アジアが完全におっこちてしまい、欧米諸国は、あこがれとおそれとの二重の興味の対象として、彼の視野を占領した。
>
> （鶴見俊輔「新島襄」、和田洋一編『同志社の思想家たち（上）』　同志社大学生協出版部、１９６５年　17ページ）

ということになります。新島はアジアを見ていなかったのではないか、その理由は、新島が日本のことしか考えていなかったので、欧米に近づきたいという気持ちと他のアジアの国々のようになってはいけない、というふたつの気持ちで一杯だった、というのです。鶴見さんは若い新島にかなり批判的です。

今にして学ばずんば

同志社で新島襄はどのように語られてきたでしょうか。入学したばかりのみなさんに新島襄について質問をしてみると、ほとんどの方から「同志社を創立した偉い人」というような返事が返ってきます。完全無欠な人格者であり、だからこそ同志社も創立することができた、ということでしょうか。いま以前にDoshisha Spirit Weekでお話させていただいたことを繰り返しましたが、もう半世紀も以前の指摘であるとはいえ、鶴見さんの批判は新島への正確な批判であるに留まりません。それだけでなく、勝手なイメージをつくりあげて、同志社という学校のために苦しんだ新島の、ある意味で、欠けていたところも含めて、ありのままの姿を理解しようとして来なかった現在の私たちにこそ向けられた痛烈な批判でもありました。

新島襄はとくにまとまった著作物を残してはいません。しかも、46歳で亡くなっていますから、そのイメージはいっそう神格化されやすいのかもしれません。一冊の書物ではないにしても、私がぜひみなさんにお薦めしたいのは、岩波文庫版の『新島襄の手紙』（同志社編、岩波書店　２００５年、以下『手紙』）です。ほぼ原文の文体を維持しながら、96通の手紙が収録されています。現在、新島の書簡は６００通近くが確認されていますから、私たちはそのおよそ１／６を岩波文庫によって読むことができるのです。

この岩波文庫に収録されている最初の手紙は、新島が15歳のときに安中藩家老尾崎直紀宛に漢文で書いた手紙でした。新島家は、上州安中藩に祐筆という、今日の記録係のような職責で仕えた家柄でした。いわゆる下級身分でしたから、小藩の故に親しい間柄にあったとしても、15歳の少年が家老に直訴するような手紙を書くこと自体、異例なことであったかもしれません。

15歳の少年は手紙の最後にこう訴えました。

> この頃亜夷（アメリカ）しばしば来たりて交易を請う。日本の騒動紛然として、まさに乱有らんとす。もし乱に及ばば、敬幹（新島の元服後の諱）は書を学ぶこと能わず。今にして学ばずんば時を失わんことを恐る。
>
> （１８５８年８月上旬、尾崎直紀宛、『手紙』、20ページ、（　）は筆者注）

これが、15歳のときの新島の手紙です。ご存知のように、東インド艦隊４隻の黒船を率いたペリーが浦賀沖に来航し、江戸幕府に開国を迫ったのは１８５３年、新島が10歳のときでした。プチャーチンのロシア艦隊が長崎に来航したのも同じ年のことでした。いわば日本中が騒然とするなかで、場合によっては、自分は勉強をつづけることができなくなってしまう。少しでも可能性があればさらに勉学の機会を得たい。それが15歳の新島の願いでした。私はこのときの「今にして学ばずんば時を失わんことを恐る」という新島の言葉に、何度も心を動かされてきました。新島は、この感動的な言葉によって、家老尾崎から尾崎の部下である父民治を説得してもらう心づもりでした。残念ながら、尾崎はこの直後に亡くなってしまいましたから、私たちはこの手紙の影響とその結果を知ることはできません。

そこで、私の妄想を思い切り拡げてみれば、このとき、15歳の新島がいまこそ学びたいと考えなければ、その17年後の同志社の誕生はあり得なかったことになります。この私の妄想がまったく的外れなものでなければ、現在の同志社に学ぶみなさんにも、この「今にして学ばずんば・・・」というSpiritは大切に受け継がれていて欲しいと願っています。

このときに新島が学びたいとした動機は、幕藩体制下にあった日本の危機にあったはずです。それは新島家、安中藩、幕府、日本という垂直につながった封建制社会のなかに住む新島自身のアイデンティティーの危機でもありました。鶴見さんの視点を借りれば、その危機から脱するために15歳の新島もまた、欧米へのあこがれとおそれとを胸にいだいたということは想像に難くはありません。もちろん、そのあこがれとおそれとは、単純に自己の利益だけを求めたものではありませんでした。新島の精神的成長は、幕藩体制下の国家への緊張と反発を繰り返しながら、次第にアメリカで学びたいと考えるようになっていくのです。

１８６５年７月20日、新島は一年の航海を終えてボストンに入港します。そのとき、テイラー船長の紹介で、ワイルド・ローバー号の船主アルフィーアス・ハーディーに出会い、ハーディーに密出国の事情を説明するために新島は英文の報告を書きました。ハーディーはそれからのアメリカでの生活費、学費、すべての費用を負担していますから、それはまるで実の親子のような関係に変わってゆきます。このときの報告書は、そのきっかけになるほど説得力のあるものでした。新島は、

> 私はこう叫んだ。
>
> 「幕府はなぜ私の思いを無視するのか。なぜわれわれを自由にしてくれないのか。なぜわれわれを籠の鳥か袋のネズミのようにしておくのか。そうだ、われわれはそんな野蛮な幕府は倒さなくてはならない。アメリカ合衆国のように〔国民が直接選挙で〕大統領を選ばなくてはならない」と。
>
> （「日本脱出の理由」、『自伝』、22ページ）

と綴っています。籠の鳥か袋のネズミの状態から脱するためには、大統領制が必要だというのです。アメリカの政治体制については、Ｅ・Ｃ・ブリッジマンというアメリカ人の宣教師によ

って記された漢文によるアメリカ合衆国の地理歴史書である『聯邦志略（れんぽうしりゃく）』などによって得た情報でした。この本を読んだとき、新島は大統領の選出のことだけではなく、

授業料無料の公立学校や救貧院、少年更生施設、工場などを建てることを知って、脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した。

（「日本脱出の理由」、『自伝』、18ページ）

と告白しているのです。明らかにアメリカ社会と政治のシステムがひとつの理想的なモデルとして新島のなかで形成されつつありました。そのアメリカ社会への憧憬が新島を日本脱出にと突き動かしたとしても過言ではありません。新島のあこがれの気持ちは、それほど強いものでした。

しかし、鶴見さんが批判するように、それは一方で新島がアジアへの視点を欠く原因ともなったのです。アメリカ社会へのあこがれとおそれの気持ちは彼の視野を一杯にし、アジアをその視野に入れる空間は残されてはいなかったのです。

ですが、私はここにもうひとつ、その後の新島を理解する上で非常に重要な要素が隠れていることを指摘しておきたいのです。それは、新島にとってあこがれとおそれが大きくなればなるほど、新島は日本に留まってはおられなくなっていたという事実です。いま申しましたように、それが日本脱出の原因でした。しかし、その結果は本日の主題といたしました孤独につながるのです。とても図式的ですが、新島の際立った向学心は、新島を封建社会の日本とは異なる世界にと連れ出そうとしました。新島は家族、友人、藩、幕府、日本と離れてたったひとり、そのひとりであることを出発点にしながら、偏ったあこがれとおそれであったかもしれませんが、その不完全かもしれない自分自身と向き合うようにして、アメリカでの研鑽に励むことになりました。

あの哀れなヤコブのように

ここで私は、同志社との関係を意識しながら、新島の孤独について考えるために、よく知られたふたつのエピソードについて触れてみたいと思います。

最初のエピソードは、アメリカでの長い留学生活をほぼ終えようとしていた１８７４（明治７）年の秋、10月９日のことになります。新島はバーモント州ラットランドで開かれたアメリカの海外宣教団体であるアメリカン・ボードの第65回年次大会に出席をいたしました。間もなく、アメリカの教会が派遣する宣教師として日本に赴任するにあたっての決意を表明するためでした。

このとき新島は、日本にキリスト教主義の教育機関を設立する決意を表明するべきかどうか、深刻な悩みのなかにいました。新島は、帰国するのではなく、アメリカの教会からキリスト教を布教する目的のために日本に赴任しなければならなかったのです。それ以外の目的をもつことは認められてはいませんでした。

新島はアメリカの父母とも仰ぐハーディー夫妻に相談しました。そのときの新島の気持ちはそれから15年もあとになってから書かれた手紙によって知ることができます。

・・・ハーディー氏は、半ばほほえみを浮かべながら実に優しい父親のような口調で、「ジョセフ、うまくいくかどうか私には疑わしく思えるが、やってごらん」と言われました。

こうして同意がもらえたので私は所定の場所へ戻り、スピーチの準備をしました。心臓は高鳴り、入念に準備をすることなど全くできない状態でした。その時の私は、祈りの中であの哀れなヤコブのように神と取っ組み合い［創世記三二・二二以下］をしていました。

（「現代語で読む新島襄」編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善、２０００年、２５０ページ）

このとき、新島が自身の胸のうちを「あの哀れなヤコブのように神と取っ組み合いをした」と述懐していることに注意が必要です。『旧約聖書』の「創世記」に登場いたしますヤコブは、自己中心的な振る舞いによって若いときに兄エサウと決裂をし、故郷を遠く、そして長く離れておりました。のちに家庭と財産とを築いてから故郷に帰ることを決意します。しかし、そのためには兄エサウとの和解が必要です。目の前のヤボク川の急流はヤコブの人生において乗り越えなければならない困難を象徴しているようでした。この川を渡ることでしか、ヤコブは人生の向こう側、つまり人生の彼岸にと到達することはできないのです。

創世記には「皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った」（創世記32章24～25節前半）と書かれています。若い日に利己的な理由で、故郷をあとにしたヤコブは、長い人生の困難と苦労とによって、まずは家族や一族、そして持ち物の安全を確保し、ひとりあとに残るような成熟した人格に変えられていたのです。ヤコブはそのとき、家族や荷物とは別にただひとりになって危険な川を渡ろうとしました。聖書は「そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した」（創世記32章25節後半）と報告しているのです。この格闘は、ヤコブの人生が利己的人間から周囲を配慮することができるような成熟を遂げるまでの人生の経験そのものの象徴でもありました。ひとには、ひとりになることでしか背負うことができない人生の課題があることをほのめかしているのかもしれません。

30歳を越えたばかりの青年新島が、壮大な理想と願いを胸に秘めて、その実現へと一歩を踏み出そうとしたとき、新島はヤコブのように何者かと格闘したというのです。言葉を換えれば、新島はヤコブのように、ひとりでこの課題を背負わなければならないところに立たされていたのです。アメリカでの知人や友人たち、そして、ハーディー夫妻も新島の願いを知ってはいても、背後にあって応援することしかできません。では、神はというと、ヤコブの場合も新島の場合も、神がなんとかしてくれたというのではありませんでした。ヤコブも新島も、ただひとり、神と格闘をしていたのです。

新島の欧米諸国へのあこがれとおそれは、たしかに新島にアジアへの視野を欠落させたかもしれません。しかし、同時に新島は「その時の私は、祈りの中であの哀れなヤコブのように神と取っ組み合いをしていました」と告白しているのです。

結局、このスピーチによって、新島は多くの支持者と理解者を得て、約５千ドルの寄付金を集めることができました。このとき、帰りの汽車賃の２ドルを寄付したひとりの農夫があったことや、おなじように２ドルを、夫に先立たれた婦人が、多くのひとが去ったあとにそっと新島に手渡したことなどは、同志社ではあまりにも有名な話です。後年、新島はこうして献げられた２ドルやこのときの５千ドルを「同志社の礎」と呼んだことから、同志社では繰り返し語られるエピソードです。

こう考えてみますと、同志社は新島というひとりの青年が幕末期の日本にいたたまれなくなって、ひとり欧米の社会制度と文化にあこがれとおそれをいだきながら、神と格闘したことによって誕生した学校であったのではないかと思えてきます。もっと簡単に言えば、新島の孤独、それが同志社の大切な原点でした。

いぜんとして変わらない人びと

ところで、同志社という校名の由来については、２０１３年に放送されたＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」でも印象深く取り上げられていました。私は不勉強で実際にドラマの通りであったかどうかはわかりません。しかし、「同志社」という校名の発案はドラマで描かれていたように新島の妻八重夫人の兄、山本覚馬によるものであったことは事実のようです。同志社は「志を同じくする者の結社、共同体」という意味ですから、この校名からも新島襄、山本覚馬、そして、このふたりとともに同志社の最初の結社人のひとりとなったＪ・Ｄ・デイヴィスも含めて、「同志社」という校名自体が私どもに残された大切なSpiritのひとつでありました。

ですが、この同志社という結社にあって創立者であり、最初の結社人のひとりであった新島が、だれひとり同志社の苦境を理解してくれないと自らの孤独を訴えたことがありました。同志社というSpiritを考えれば意外な印象を受けます。さきほど、同志社は新島の孤独から生まれたのではないかと申しました。とすると、今度はその同志社という共同体において、あるいは同志社という結社名に反して、新島は孤独であったということになります。新島の孤独を考えるふたつ目のエピソードです。

そのあたりの事情をお話したいと思います。このときもまた、新島はハーディーに相談をいたしました。さきほど取り上げた岩波文庫の『新島襄の手紙』では、35番目の手紙として収録されているハーディー宛の長文の手紙が、新島のもうひとつの孤独をよく伝えています。日付は１８７９（明治12）年９月４日。そのころ、同志社英学校の創立から４年目を迎え、三か月前の６月12日には、英学校最初の卒業生を世に送り出したばかりでした。傍目には、同志社のスタートは順風満帆に見えていたことでしょう。

ところが、新島はその最中にまるで泣き言のような手紙をハーディーに送っているのです。

（この危機について）宣教師の方々にもお話ししましたが、彼らは事態を認識していないと思います。このように微妙な状況を理解してもらうのは、むずかしいのかもしれません。

（『手紙』、１５０ページ、（　）は筆者注）

とする訴えは、諦めのようにも聞こえてきます。岩波文庫版では、この手紙には「実際には学生にも、宣教師である教員たちにも理解できないほどの危機的状況にあり、新島は当事者として苦難に喘いでいた」（『手紙』、１４０ページ）との解説文が付されています。新島は孤立無援のなかで、ひとり今からお話をする同志社の危機に立ちむかわざるを得なかったのでした。

この危機は、同志社女子大学の前身である同志社女学校に端を発したものでした。新島は同志社女学校に、ふたりの外国人女性宣教師を雇用しようとして京都府に雇用を申請するのですが、その理由も示されないまま拒否されてしまいます。新島は当時外務卿という立場にあった寺島宗則にも直接交渉をいたしましたが、埒（らち）があきません。

新島は日本政府の頑なな姿勢の背景には、京都府知事によって「教育をすると見せかけて学校を始めたが、本当の目的は帝国にキリスト教を広めることだ」（『手紙』、１４４ページ）という噂を流されたことが原因ではないかと疑心暗鬼になっています。

一見、同志社女学校にふたりの女性宣教師を雇用できるかどうか、小さな問題に過ぎないようにも見えます。しかし、その背景には日本政府の誤解を解かなければ、存続そのものが危ぶまれるほどの暗礁に同志社は乗り上げていたのでした。

新島はアメリカ留学中から交流のあった森有礼に、東京まで出かけて相談いたしました。ご存知のように日本最初の文部大臣ですが、当時、森は外務大輔という立場にありました。ハーディー氏に宛てた手紙には、森の助言がそのまま書かれていますから引用します。

もしもあなたが、アメリカン・ボードの資金ではなく自前の資金を用いるのであれば、学校を存続させる権利も外国人教師を雇う権利もあなたにはあります。外務省は、あなたが毎年アメリカン・ボードから補助金を受け取り、それに全く依存しているのをたしかに好ましいとは思っておりません。

（『手紙』、１４６ページ）

これが森の助言です。つまり、毎年送られてくるアメリカからの補助金で運営するのではなく、同志社が自由に使うことのできる恒久的な基本金を設定して、その基本金によって運営するのでなければ、日本政府は同志社を日本人の学校としては認めないだろうというのです。森の助言は、それが認められなければ、外国人教師の雇用どころか、学校の運営、存続そのものも不可能になるという厳しい警告でもありました。

森の助言にしたがって、この巨大な障壁を突破するためには、新島は同志社の校長として、少なくとも10万ドルの基本金を準備しなければなりません。10万ドルというのは、さきほど新島が哀れなヤコブのような気持ちになって、アメリカの教会で日本にキリスト教主義の学校を設立したいと訴えたときの寄付金が５千ドルであったことを思えば、あまりにも巨額です。それからわずか数年後に、同志社はその20倍の巨額資金がなければ、立ち行かない大変な危機に陥っていたのです。

結論を急ぎます。結局、新島は周囲のだれも気づいていない状況のなかで、この巨額の資金援助を、これは幸運と言うべきかもしれませんが、当時たまたまアメリカン・ボードの委員長であったハーディー氏に懇願しました。この無謀にさえ思える新島の作戦は成功し、幸いにも同志社はこの危機を脱することができました。

新島は、同志社という高い理想を共有する結社にあって、ただひとりその危機のために粉骨砕身、同志社を危機から救ったと言えば、ひとりの英雄物語になってしまいます。しかし、私はここで、新島はこのとき、きょうのお話のなかではふたつ目の孤独ということになりますが、この孤独の経験によって、新島が若いころとはまったく異なる視野を獲得していたことに驚くのです。先ほど来、新島の欧米へのあこがれとおそれが、新島の視野を狭くしたのではないかとの鶴見さんの指摘について触れてきました。けれどもこのとき、新島はあこがれとおそれどころか、明確に欧米を批判し、自らが立つべき場所がどこにあるのかをしっかりと自覚しているのです。

この手紙から関連するところを引用してみたいと思います。

善良な宣教師諸君は、今までのところ聖書を教えることに熱心なあまり科学的な教育［普通教育］を軽視してきました。多くの有望な青年たちがひどく失望して退学し、東京の学校に行ってしまいましたが、そこではキリスト教の影響を何ら受けることがありません。

このように前途有望な学生たちを失うことは耐えられません。

（『手紙』、１５２ページ）

というのです。つまり、同志社に高いレベルの学生をつなぎ止めておこうとすれば、牧師養成を目的としたキリスト教教育だけではなく、多方面にわたって専門的な教育が必要だということになります。しかし、新島はそのことを宣教師たちが理解してくれない、と嘆いています。日本人が宣教師たちとうまくやっていけないのではなく、新島は、宣教師たちが「日本人とうまくやっていけないのです」（『手紙』、１５３ページ）と訴えています。そして、

その主な理由は、彼らがいぜんとしてアメリカ人のままでいるためです。彼らの習慣、考え、そして想像力は、すべてアメリカ式なのです。アメリカ人が良いと考えることでも日本人は軽蔑するかもしれません。アメリカでは栄誉であることも、ここでは（日本では）不名誉なことと見なされたりします。

（『手紙』、１５３ページ、（　）は筆者注）

と宣教師たちが日本人とうまくやっていけない理由を冷静に分析しているのです。かつて、その視野に欧米へのあこがれとおそれが独占されていて、アジアを視野に入れることができなかった新島が、このときには、他ならない欧米の人びとのなかに、自己自身を絶対化するあまり、日本にいながら日本を視野に入れようとしない人びとがあることを嘆いているのです。

私は、同志社という結社のなかで、新島は孤独であったにもかかわらず大活躍をしました、などと申しあげたいわけではありません。そうではなく、その孤独、孤立無援の状況のなかで、新島は自己を絶対化することの危険に気づいていたのです。

孤独がひらく可能性

新島は、孤独をきっかけに日本を飛び出し、10年に近い海外留学を経験することになりました。そしてその結果、日本にキリスト教主義の学校を創設したいと願うようになったのですが、そのとき新島の心の底には深い孤独が横たわっていました。さらに、ようやく仲間、志を共有する同志たちと同志社を結社したときも、新島は孤独と決別したどころか、まさに孤独の淵に立たされていたのです。

もちろん、私の印象ではあるのですが、「同志社」という学校の創立者でありながら、新島には生涯にわたって孤独の影がつきまとっています。しかし、新島は人生を被う孤独のなかで、いえ、その孤独があったからこそ、若い日のあこがれとおそれを過信してしまうことなく、またそれを絶対化することのない視野を獲得していくことになりました。なぜでしょうか。

最後にそのことを少しだけ考えておきたいと思います。人間の孤独を課題とした哲学者のひとりに、戦後アメリカで活躍したハンナ・アレントというユダヤ系の哲学者がいます。アレントは『全体主義の起原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（大久保和郎他訳、みすず書房、１９７２～７４年）という本のなかで、人間の単独性（人間がひとりである状態）には「孤独（solitude/Einsamkeit）」、「孤立（isolation/Isolierung）」、「孤絶・見捨てられていること（loneliness/Verlassenheit）」の三つの状態があると指摘しました。アレントは、「孤独」とはたんなる孤立ではなく、自分自身とともにあるということであり、それは自分自身の内面ときちんと向き合うことのできる状態だと考察しました。そして、ひとが思考するためには孤独であることが絶対的に必要だと考えたのです。しかし、一方で、孤独ではなく「孤立」という状態を考えてみると、それは大衆（多くの人びと）のなかにあって、孤独であるということのきっかけさえ奪われた状態のことを指していると言うのです。多くの人びと、すなわち大衆の声にかき消されて、自分自身との対話を妨害されてしまうからです。

さらにアレントは、世界への根本的な信頼を失った状態について、「孤絶」「見捨てられた状態」の人間として考察しています。それは、自分であること、私であることすらも失った状態です。そのとき、人間は自分自身と向かい合うことさえできなくなってしまうのです。これがおよそアレントの考えですが、アレントは、だから、ひとが人間らしく生きるためには、とぎ澄まされた孤独と、世界を信頼する精神こそが必要なのではないか、と訴えたのでした。（ハンナ・アレントの「人間がひとりである状態」については、石神真悠子「ハンナ・アレントにおける〝一人である〟ことの多層性―政治的主体化へ向けて」東京大学大学院教育学研究科　基礎教育学研究室　『研究室紀要』　第45号　２０１９年71～80ページを参照）。

そう考えますと、きょう私は、新島の人生における単独性について、一口に「孤独」と表現してきましたが、それぞれの段階で、孤立や孤絶との相剋を経験しながら、新島は自身の内面と対話をしてきたのかもしれません。

新島がその人生において何度も孤独を経験してきたのは、若いころの家族、藩、幕府、日本という縦の系譜のなかで身近なものを大切に思う気持ちから始まって、その視野をどんどんと拡大しながら、獲得してきた精神であったような気がいたします。加えて新島は、だれからも理解されないかもしれない重要な決意を、たったひとり、神との格闘のなかで行動に移しました。もちろん、そこにはアメリカの恩人の助言やアドバイスがあったとしても、それはまるで一晩中、神と格闘したヤコブのように疲れ果てて、立ち上がれないほど重い決断でした。しかし、そのとき、新島をささえたものは、故国日本の同胞をおもう気持ちであったことを見逃すことはできません。

そして、その自分以外のだれかを大切にしようとする新島の祈りにも似た願いは、それが若い日のあこがれとおそれに自らを満足させる狭い視野から、新島を解放してくれる原動力にもなったのです。この原動力が、新島を孤立や孤絶から救い出していたのかもしれません。

そして、生涯にわたって逃げることなく、孤独のなかで、他者をみつめ、自らの課題を背負うことに努めた新島の精神もまた、私たちが受け継ぐべき大切な同志社のSpiritであるのです。

土の塊に過ぎない人間が、命の息によって生きることができるようになったように、同志社に学ぶ私どももまた、この新島の精神をしっかりと呼吸しつづけて、それぞれに掛け替えのない人生を歩みつづけたいと心から願ってやみません。

２０２１年10月28日　同志社スピリット・ウィーク秋学期

オンラインによる「講演」記録